

拠点名称：ソーシャル・ニューロダイバーシティ科学研究拠点の創成と推進

拠点代表者：人間系・教授・小川 園子

研究拠点形成計画の概要

急速に多様化、複雑化、ボーダーレス化する現在においては、多様な他者を理解し、適切な関係性(社会性)を維持できる社会を実現することが最重要課題である。本研究拠点では、「ひと」の多様性(ダイバーシティ)に着目し、その神経・生物学的基盤の理解(多様性の生物学的基盤 G)と、「ひと」の認知・学習・行動・身体機能の多様性の評価・理解(多様性の評価 G)をベースに、多様性を積極的に活かす社会構築に必要な具体的方策を立案(多様性社会の構築 G)し、その社会実装に向けての橋渡し(橋渡し研究 G)をする、新融合学術領域「ソーシャル・ニューロダイバーシティ科学」を創成し、国際基準の研究を展開する。それを通して、多様性に関わる社会的要請に応え得る人間科学、すなわち「社会科学領域におけるトランスレーショナル研究」を推進する国内初の研究拠点を確立する。

研究拠点形成に係る研究の概要

「ソーシャル・ニューロダイバーシティ科学」において、我々は「ひと」の多様性を神経・生物基盤レベル、および認知・学習・行動・身体機能レベルで解明する研究と、「ひと」の多様性を活かす社会の構築を見据えた研究との有機的な連携・融合を目指す。本研究拠点では、現代社会が取り組むべき4つの多様性の課題、すなわち「性」「世代」「障害」「異文化」に焦点をあて、行動神経科学、基礎・臨床心理学、基礎・実践教育学、特別支援・福祉学などを専門とする学内の研究者が共同して研究を進める。それぞれの分野でこれまでに蓄積されてきた研究知見を、現代社会における多様性というキーワードのもとに整理した上で、「ソーシャル・ニューロダイバーシティ科学」という新しい研究領域の創成を試みる。学内組織である DAC センターおよび附属学校 11 校との連携や、ダイバーシティに関連する学術的基盤の重要性を評価する企業・法人や、国・地方公共団体をはじめとした多くの主体(マルチステークホルダー)との連携を通して、基礎研究で得られた知見を社会実装するための橋渡し研究を実現する。

多様性の生物学的基盤 Gでは、社会性行動や認知機能における性差、個体差をキーワードとして、「ひと」の多様性の神経・生物学基盤の理解に向けて、主に動物モデルを用いた解析を進める。**多様性の評価 G**では、学校教育現場、発達障害者支援、高齢者支援において、多様なニーズ に対応することを目指して、「発達・加齢」「障害」「性分化」「環境変化(異文化など)」に伴う多様性の表出機構を包括的に理解することを試みる。**多様性社会の構築 G**では、「ひと」の多様性を活かす社会の構築に向けて、教育、福祉、行政制度の立案の基盤となる研究を推進する。**橋渡し研究 G**は、生物学的基盤グループと多様性評価グループの知見を、様々な現場での社会実装へ橋渡しすることを目標に、実践的研究を推進すると同時に、実践的研究から派生した問題を、生物学的基盤や多様性評価グループにおける基礎研究にフィードバックする機能も果たす。

ソーシャル・ニューロダイバーシティ科学研究拠点の創成と推進

